

尊経閣文庫蔵『堺記』翻刻

室町軍記研究の一環として『応永記』を検討したい。『応永記』は応永六年(一三九九)に起こった、室町幕府に対する大内義弘(周防・長門など六箇国を領した大守護)の反乱を描いた軍記であるが、相当数の伝本が報告されている。それらは、加美宏氏の説によれば、第一類と第二類に、小林賢章氏の説によれば、類別はなく五種に分類されるという。そのいずれの説においても第一に挙げられているのは、以下に翻刻する尊経閣文庫蔵『堺記』である。この系統本は尊経閣文庫蔵本が唯一のものだが、紹介者富倉徳次郎氏の指摘のように、「堺記を一つの合戦記録風のものとして整理したものが、応永記である」と見るべき「伝本であるかは兎も角として、もっとも注目すべき伝本であることは確かである。この伝本を中心にした『応永記』の研究は今後の課題となるが、その基礎作業として尊経閣文庫蔵本を全文翻刻する。

和田英道

ところで、この尊経閣文庫蔵本は、村上光徳氏によってかつて一度翻刻されたことがある。しかし、本文の訓みを初め、字・濁点の有無・返り点の有無・句読点の打ち方・注記の類別等、諸所において見解を異にする点が多く、ここに改めて私の翻刻を示すことにする。

なお、尊経閣文庫蔵本の書誌は、以下のとおりである。

〔函架番号〕第四十九号〔巻冊〕一卷一軸〔書写年代〕室町時代中期(伝後崇光院筆)〔外題〕鳥の子無地紙題簽〔原か〕縦13横3.5センチに墨書「堺記」〔同筆か〕〔内題〕なし〔表紙〕紺地に亀甲紋繋ぎに花模様入り裂表紙〔後補〕〔見返し〕鳥の子に金切箔散らし〔料紙〕鳥の子に銀切箔散らし〔寸法〕縦26横7センチ(38センチ強の料紙20枚繋ぎ)〔用字〕漢字平がな交用〔書入〕墨書入(同筆・別筆の二種)〔その他〕牙軸。本文一筆。桐箱に打付書で「堺記後崇光院原筆」とある。また、箱の

中に元表紙が納められているが、損傷が甚しい。その表紙は焦茶色地に茶色の草木浮紋緞子、見返しは金銀泥地に金切箔と金砂子散らし。

注一 加美宏氏「応永記」の諸本について（『甲南国文』第二十六号、昭和五十四年三月）

注二 注一に同じ。

注三 「応永記」諸本の系統（『語文叢誌』昭和五十六年三月）

注四 「応永記」の形態——伝後崇光院筆写記の紹介——（『国語と国文学』昭和二十四年十月）

注五 「塚記」伝後崇光院筆写（上・下）（『駒沢国文』第四号・五号、昭和四十年十月・昭和四十一年十一月）

凡 例

- (一) 本稿は「応永記」の一伝本たる前田育徳会尊経閣文庫蔵「塚記」を忠実に翻刻したものである。
- (二) 翻刻に際しては、次の規準に従った。

- ① 漢字・仮名の別、仮名遣い・送り仮名・返り点など、す

べて原本のままとした。

- ② 漢字・仮名はすべて通行の活字体に改めた。また、異体字・旧字体・略字体は正字体・新字体に改めた。その認定の拠り所としたのは、藤堂明保氏編『漢和大典』（昭和五十三年四月初版、学習研究社。第二十二刷使用）である。

(例) 灵↓靈 處↓処 卩↓部

- ③ 踊り字「く」 「々」は、漢字の場合は「々」に、平仮名の場合は「ゝ」に改めた。

(例) 散くく↓散々 国々々↓国々

- ④ 書き入れは、同筆・別筆の別なく、すべて採録した。ただ、数箇の例外を除けば、右横の小書きの書き入れや返り点は別筆である。

- ⑤ 虫食い・損傷による判読不能箇所は、で示した。

- ⑥ 私注にはすべて（ ）を付した。

- ⑦ 読解の便のために私意に句読点と引用符を付した。

本稿の成るに際し、翻刻のご許可を賜った前田育徳会尊経閣文庫に、記して感謝申し上げます。

堺 記 (外題)

応永六年九月の比、客星南方に出けるを、陰陽師有世御勘申けるハ、「太白犯熒惑、九十日中ニ有大兵乱て大戦流血、大將軍慎」云々。又云、「兵乱有て年中可易地」云々。又惑陰陽師勘申けるは、「兵乱ありと云とも国主の凶に非ず、謀叛の大將慎有て可易地」とぞ申ける。依之、「占文の旨不輕」とて諸寺諸社に於て御祈禱とも有とかや。乍去、「是程天下濤平の世に何事か有へき」とそ人々申合ける。爰同年十月十三日、大内左京權大夫入道義弘、和泉の堺に参着す。是ハ度々の依召上洛と聞ゆ。然は廳京都に可上洛之処、其儀ハ無して平井新左衛門尉を以案内を啓し、其身ハ上洛の企もなし。和泉紀伊国には筑紫中国の勢共満々たりと聞ゑあり。さるほとに、「野心の企あるか」と風聞す。既上聞に及、青蓮院の宮被申云、「野心の風聞ハ候へとも、さる事ハ候ハし。急き上洛すへしと人を可遣」由被申て伊与法眼を御使として被仰之処に、「条々怖畏無きに非ハ、依何か上洛仕へき」よし申之。「さてハ野心治定なる者哉」など沙汰あり。「乍去是ハ内々門跡よりの御使也。上として一往事の子細を被尋候ハては如何あるへき。若一旦の荒説唐説なにて合恨ヲ、世上の乱をなし民間を悩さむ事も不可然。彼又不諛は累世武略の忠節を失ハむ事も不便也。能々子細を可被尋」とて以絶海和海尚十月廿七日、専使として堺に下向、廳大内方へ被給案内之処、大内上意及再三ハ、「御返事如何可申哉」と先内談する処、新介申けるは、「度々の仰を疑奉り、実否不分明伝説を以て上意を違犯せむ事、愚案の至なり。凡先祖にハ一国にも任せざりしに、当代に至て六箇国を拝領し栄花身に余て剩上意を輕せん事不可然。今度ハ僧中尊宿の絶海和尚を以て被仰下。是他異なり、如何にも先非を翻し先參洛を企られ候ハ、可然か」と申せは、平井の備前入道、「此趣尤其謂多端。縦為上いかなる御計ありといふとも、為下は幾度も被歎申こそ常の儀にて候へ。又随仰上洛有て被歎申は、縦何なる事を思食企といふとも、なとか御優免有の儀なからむ。今ハ剩上より被宥仰分にてこそ候へ。無御承引

は、忽君臣の儀に背き朝敵と成へし。然は当家の滅亡時刻を廻すへからず」と詞を残さず教訓しけるは、朱雲か折檻を辛毗か引裾けるもかくやとそ覚ける。されとも忠言逆^レ耳故にや、其心にたかへり。去程に杉豊後入道進出て申けるは、「抑都鄙^ニ於て多の大敵を亡し忠の^ニ有て更不忠を存せず。其實に依て国々を拝領す。子々孫々までも不易の思を成越あり。今何の罪科有てか国を被召放へき御企有そや。是ハ偏^ニ当家を亡へしと云御巧也。仍其遺恨を散せむか爲に此界^ニ御越あり。内儀ハやく外聞す。天下の大事を思食立上は一往の御宥を以てたやすく仰に被^レ随条、事いるかせ也」と申せは、運の極にや、「此儀尤可然」とて臆絶海和尚^ニ対面す。絶海の給けるハ、「先立被仰之処被^レ遺心緒^ニ之由被聞食間、重て上意の趣具に申へしとて愚僧下向仕候。所詮以浮説上意を計奉られん事不可然。千万の巷説ありといふとも急き參洛を遂て御目に懸て此間の旨趣をも被^レ申披^一、又上意をも承、分々^{分明カ}給へし。百聞一見^ニ不如とこそ申候へ。一朝の忿を以て上方の素意を被^レ掠^一申事、似^ニ無^ニ遠慮^一」と被仰ければ、大内、「仰のとほり又御教訓の旨畏所候。誠君恩ハ泰山よりも高く巨海よりも深し。されハ蕭何か功をさみし陳平か儀を重す、君の為一命を軽する事、風前の塵も非^レ喻^ニ。就中九州一統して御敵数万騎國中^ニ可打越企あり。今河の伊与入道探題とし被差遣と云へとも其勢僅^ニ三百余騎、微力にして九州に渡海に及ハす。然間、合力を致して可罷向^{之カ}由上命を蒙て某十六歳にし^{志カ}四千余騎を率して探題相共に九州に渡海し、廿余年の間於所々廿八箇度合戦、敵を亡し無武の忠節を致す、世の所^レ知人の所^レ知也。又山名陸奥守俄に京都に乱入之間、某遠国の勢^ニ及相催^ニ某勢僅^ニ二百余騎にて取陣之処、彼勢小林七百余騎当陣にかゝる。入道一命を輕し合戦を致して敵十余人打取自身二箇所手負、大勢を追退く。一陣破ぬれば殘党^レ全故に其軍破、陸奥守被討了。仍其軍功に和泉紀伊国兩國を給ハる。其後、南朝和睦の事廻^ニ籌策^一兩朝一統するの^ニに非す、三種の神器を当朝に奉^レ渡。是忠節の第一に非哉。凡此神器と申ハ大国の秦の李斯か藍田の玉にて造し印璽にハかハりて、忝も天照大神より相伝て代々の帝王相承し給^ニ三国無双の靈宝也。其後、去々年小式対治事再^ニ三被仰下間、舍弟伊与守同六郎を大将として五千余騎に^之九州に発向する処に、小式菊地千葉大村以下九州一同に筑前国^ニなうちに取陣。敵ハ大勢御方ハ小勢合戦延引する間、入道

自身馳下て不日に大敵を対治しぬ。後日に承れば入道を可対治之由小式菊地か方へ潜に被仰云々。卅年か間無式の忠節を致して何の罪怠に依て如此の御計有ける哉。是一。又眼前の御大事、山名已ニ乱入之時一命を捨て其功を成に依て預忠賞二兩國を幾程もなく可被召放事、何程の罪科哉。是一。又小式対治之時舍弟伊与守打死仕候処、其子不三預軍功二、別而又御感の仰なし。是一。結句京都に被召上て可被討之由有御評儀云々。是程に忠節の身ながら背御意てハ争か可上洛仕候哉」と涙を流して申けれハ、絶海又、「所々の御忠節及数箇度事、天下其隠なし。されハ重疊の御恩賞人にすくる、者也。但小式対治事ハ深く上意に違て被三加二対治一上ハ何そ彼を御眞鼻一事両様の御沙汰可有哉。只惣右馬か計として京都より被仰下旨有と称して九州の国人を相語事をはなしかハ上方御存知有へき哉。次兩國可被召放事ハ曾て被仰出旨もなく、又拝領の人もなし。而に世の荒説を以てみたりかハしく上を可奉恨事、率爾の次第也。又与州打死事御感の御沙汰有へき処ニ、御辺に可有上洛之由度々雖被仰、参洛于今延引。彼賞の事も上洛を御待あるよし伝承者也。是又さほと延引にあらず、深き恨の題目に不可入者歟。次於京都可被打事ハ内外其沙汰なし。若さ様の趣あらは縦上意といふとも僧家の身として慈悲を先とすへきに、争か人を失へき。籌策を致して可下向哉。此条々更以其謂あるに似たりと雖とも、情事の子細を案するに、忠にほこり給ゆへなり。忠に誇は、其忠還て不忠たるへし。されハ范蠡ハ越王に仕けるに、越王呉王と戦て戦破軍て越王生擒れて恥辱を当しに、范蠡口惜事に思、出入に嘗胆、臥ときは枕戈も恨を忘れず。果して呉王と戦て遂ニ会稽の恥を雪たりけるに、越王悦て大ニ賞を行ハむとするに辞て不受之。「功成名遂て遂身退ハ天の道也」とて越国を去にき。是をしそ賢臣とハ申せ。其祿を持たから上を軽しめ奉らん事ハ天命に背へし。天命に違ハ神明仏陀も加護あるへからず。能々可被廻思慮哉」と被仰ければ、大内、「条々仰旨承候了。御政道を奉諫へきよし鎌倉殿と同心申子細あり。今随仰上洛仕らは、鎌倉殿御約束可相違。来月二日鎌倉殿御共申、同時に可企参洛。山門南都も内通の子細候。鎌倉殿ハ今ハ既箱根山をも御越候らむ。いしき御大事にてこそ候ハめ」と申座敷を立ければ、絶海も無是非すまじけに思給て足はやに立急き上洛ありて同廿八日、義弘か趣具キ被申けれハ、「若荒説にてもやと思食つるに、さては野心治

定しけり。此上は急き打手を可被向」とて管領先管領以下大名とも被召て御評定ありければ、此事洛中ニ披露なり、上下万民みな思々に用意仰天無極。「何日京都に可責上」など荒説あれハ、町々に木戸を伝、或ハ女房を輿車にとりのせ、或ハ資財雜具を牛馬に揚付て辛櫃皮子色々に所もなくそ持運ける。足よハとも引つれて醍醐山科嵯峨仁和寺伏見深草藤の森小原志津原せれうの里五里三里の片辺に思々に忍けり。行者帰者引きらす。三年質の倉まほりハけ太刀片鏝され具足流ハてたるふるふたを手鏝をくりて責出し、呵法に取て行もあり。還而路次そ物見なる。さて打手をそ御評定ありける。「卅余年振舞所の武威ハ偏に我御威力也。全く義弘か力にあらず。縦武力世に越と云とも朝敵とならは何程の事かあるへき。異国に蚩尤逆を成し黄帝の位をうハ、むとて涿鹿の野と云所にて相戦処に、蚩尤霧を降す事七日、去程に黄帝の官軍方角を失けるに、黄帝の臣下風后氏と云者指南車とて南を指車を作て四方をおさへ、其戦に打勝て蚩尤を誅し國を治給こと一百年、又唐玄宗皇帝の時安祿山逆を成し、自耀武皇帝と替尊号事僅二年にして其子慶結に殺されぬ。吾朝の守屋ハ弘法を滅し王法を断せんとせしかは、聖徳太子是を誅伐し給。天慶康和の逆臣、何も誅戮せられすと云事なし。当代には山名陸奥守氏清か謀叛、これを対治せられる。今の義弘もさこそあらむすれ」とて皆御手分治定あり。先細河右京大夫三千余騎、京極治部少輔入道二千余騎、赤松上総入道三千余騎、都合其勢八千余騎、十一月八日、淀山崎より和泉国に発向す。同八日、御所東寺に御陣を召さる。御共の人々管領同子息尾張守先管領同子息左衛門佐吉良石塔洪河一色土岐佐々木今川武田小笠原富極河野を始として都合其勢三万余騎、東寺広と云ながら内外近辺宿もなく四条五条に及まで御勢共そつかへたる。奇手陣つめ遅々すとて同十四日、八幡に御陣を被召けり。同日、八幡より管領先管領を始として都合其勢三万余騎、和泉国に発向す。大内此事承り、「御所已御動座あるこそ恐なれ」とて北_二向て礼を成申けるとかや。是まては君臣の礼を存けるにや、哀にそ覚ける。さて大内、「此上ハ」とて合戦の様評定しけるに、新介、「此間ハ随分教訓しけれども無承引上は、今更捨てのくへきには非」とて評定の末席に出て申けるハ、「先河内の嵩山を打取、東条土丸の辺を陣に取て和泉紀伊国を管領せは、五年十年なりと云とも御方つまるへからす。堺の浦清水の浦中国の船の

通路も便あるへし」と申けれハ、杉豊後入道進出て、「軍ハ勝んとて其氣進み、軍負むとてハ必其氣退く。されハ先する時は人を制し、後にする時は人に制せらるとこそ申せ。堺の浦に落体にて尼崎に取あかり、其より八幡の御陣にかゝりて思様に合戦して勝負を一時に可決」と申けれハ、平井本より此謀反無益の事と頻に諫ける者なれハ、「城を構へ他国を打取らば、のこる籌策もあるへからず。此まゝにてこそ後訴もあらんすれ」と心中に思けれハ、「海上の事片時も風波難測。又堺打捨て出てハ和泉紀伊国の国人皆京の御方へ可參。然は御方ハ弥御勢すぎ、御所勢ハ弥重なるへし。多勢に無勢不可叶。天の利ハ不ニレ如地利ニ、地利ハ人の和にハ不如とて險阻の城を構んよりハ人を利せよとこそ見へて候へ。此所は当方の管領□して非義を致さゝる間、土民も悦の眉を開て聊も御方を背心あるへからず。其上兵糧材木多き所なれば、思様に要害を構へし。他国の城を打取らば手者をも可拔。大事の前の少事ノコトに人力を尽さむ事も無益也」と申せは、大内此儀に同じ、鹽材木を集め数百人の番匠を以種々の工を尽して勢楼四十八矢檣一千七百、東西南北各十六町、魚鱗鶴翼の陣を張けるハ、蜀の諸葛亮か呉国を打取らむとて江に於て天地風雲飛龍翔鳥虎翼蛇蟠の八陣を造しも是には過とそ見へける。大内城の体打廻て見て、「此内に手者五千余騎ハ籠たるらむ。縦一万騎と云とも、なしかは被破へき」とて悦けるか、「乍去今度の義兵ハ日比の本意にあらず。引替て不慮に出来する事也。閑に事の子細を案するに、一旦の恨を以て御所の高恩を奉忘かと天の責不可逃。運命こゝに尽ぬる上ハ打死せん事一定也」とて日来帰依の僧を請し葬礼の儀を調へ、七々日の仏事以下慰勲に沙汰之。七句に余老母の周防に有けるにも色々の形見に文をそへ、「定なき世のおくれ先たつ道芝の露の命の消ても残水茎の跡にとゝまる母思の涙川、淵ハ瀬になる習をも如何ハせん」と書遣て、又舎第六郎に同形見に文をそへ、「此方の合戦ハともかくもあれ、其方の国々堅く可持レ之由申遣けるとかや。又相隨者も各父母妻子に形見を遣し、皆打死の用意をし、殺人刀活人劍の公案を心に逼塞する者もあり、或ハ利劍即是弥陀号の案心を守者も有けり。さて大内、「今生の思出に」とて千句の連歌をし百首の和歌を誦、内の者共にも、「最後の遊をせよ」とて酒宴乱舞日夜不絶。さるほとに京勢時日を廻さす南北の三方に陣を張、西へは四国淡路の海賊百余艘の舟にてつめ

寄たり。何かしたりけん、一首の歌を書いて城のきわにそ立たりける。

陣取を思立ける大内こそ我いきしにの堺なりけれ

大内、「今ハ諸方をか^{（か）}へて何^{（に）}かせん」とて杉九郎次郎二百余騎、森口の城にて今川の上総入道結城越後入道と日々に矢軍有て支たりけるも呼とり、守主山に杉備中か有けるをも堺に呼返し、「一所に成てひとへに打死せむ」とそ出立ける。さて打手の評議にハ、「是程の平城只一束に責落すへし」とて十一月廿九日、卯刻より押寄て御方三万。騎^余籙楯の板をたき一度に時を作れば、城内にも五千余騎大鼓を打矢櫓かいたてをたき時の声を合す。敵御方の時の声天地も響き山海も破かと覺たり。御方四方より我先に破らむと責けれハ城中の四方の矢櫓より究竟の強弓^{（きょうきゅう）}精兵さしつめ引つめ散々に射、或ハ石弓を放けり。爰に管領の手二千余騎北の方の一二の木戸を責破て已^{（い）}三三の木戸を破らむと手いたく戦間、遊佐を始として手負七百人難儀に及けるに、遊佐手負ながら一足も退かず、なを敵の中に走入打死せむとしければ、管領の子息尾張守、「遊佐討すな」とて懸入、命を惜まず責戦。卯時より戌時まで戦ける処に山名右衛門佐入道同民部少輔を始として一門五百余騎管領の手に入かへて散々に戦ふ。城中より杉豊後同備中野上の豊前を先として五百余騎切て出て向敵を追しさらかす処に、山名民部少輔兄弟二人一足も退かず城中にかけ入、敵あまた打取て散々に戦ふ。是を見て一門五百余騎民部少輔を打せしと切て入、敵御方乱合^{（らんごう）}、先陣うたるれハ後陣後を踏躰へ飛こへ火出ほとそ戦ける。大内其日は白綾威の腹巻に甲をはぬき下人にもたせ鶴毛なる馬に金楯^{（きんたて）}の鞍おきて乗り、二尺七寸の金作の太刀をはき太刀長刀もち四方の戦下知してかけまはりけるか、「こゝこそ手いたき合戦なれ」とて二百余騎を以て合力する処に、伊勢国司北畠の源大納言同子息新少將其勢三百余騎にて山名と一所にて此手を切退く。城中に乱入らむとて命をすて、切入処^{（いりところ）}敵手強^{（つよ）}闕間、北畠少將を始として手負打死数十人京極六角は東を破らむと新介か手に渡合^{（わたりあひ）}責戦^{（せせん）}処^{（ところ）}、小笠原二百余騎是も新介か手にもみあハせ卯時より夜半に至まで四方すきもなく戦間、敵御方手負死人幾千方と云数を知らず、偏に帝尺修羅の戦とそ見へたりける。互に人馬の息も尽ぬれば各本陣ニ引退く。城中の事ハみねハしらす、翌日或杉輿にのせ或

馬に縛^レ付手負とも帰道々に充滿、其数をしらす。土岐宮内少輔入道大内に同心して尾張国に打入地下の者とも相催シ、程なく七百余騎に成ぬれば美濃の長森に打越処ニ、池田のすハラ一所に馳加る。土岐美濃守和泉の陣にありけるか、此事を聞急き馳下て時刻を不廻押寄る。宮内少輔すハラ相共に美濃守に戦けるか、宮内少輔打負て又長森に立籠る。美濃守頭あまた取て八幡の御陣へ進けるとかや。又山名陸奥守か嫡子宮田、「時を得たり」と是も大内に同心して丹波国名字の宮田ニ打入ル。其より都へ打のほり京中を焼払ひ八幡の御陣に懸て、「亡父の本意を遂へし」とて三百余騎にて追分までぞ打越ける。小番の衆二頭を八幡の御陣より被向けれハ、纏て両陣を張り待懸たり。荻野の源左衛門先陣にて佐々木の小原か陣にかゝりてたゝかふ。小原小勢なりけれども命をすてゝ戦ふ間、源左衛門を始として四十余人打取。宮田、「本より一家の事也。敵には何をかさくへき」とて大館か陣に懸る。宮の上野ハ、「大将宮田を打取らむ」とて敵の中に破てゐる。落合物七八人打取てなを敵の中へ懸入て散々に戦ひ、思ふ敵あまた打とり打死しけり。さるほとに今川の奈古屋是を見て大勢の中に破ていり責戦ふ程に、馬の太腹射させてかち立に成て向ふ敵十余人打取、鎧武者をも引寄一丈二丈なげころす。後には太刀をも打折けれハ刀はかりにて散々に振舞けるか、さすかあまた深手負ひ具足ハもたす力つよしといへともあまた落合ければ討けり。遠江国住人勝真田の遠江守よき敵二人打取、頸をは鞍のしほてに付て是も奈古屋と一所に打死せむとて其処に馳入、散々に振舞て討死す。宮田人馬の息をつかせむとて引返せは、御方も本陣に引帰。京極五郎左衛門是も大内と内通して近江国に打越甲良ノ庄へ打入て散々に焼払、地下の者をそ従へける。近辺乱妨野武士共責出し二百余騎に成にけり。三井寺の衆徒に被仰ければ、甲五百余にて勢多へ打向ひ橋を引て待懸たり。五郎左衛門馳て勢多へ打越けるか、三井寺の衆徒相支たりと聞て昔の一来法師筒井の淨妙なにか事を思出てこらくやおもひけん、守山に引かへしたり。京極和泉の陣につめたりけるか、是をきゝ暇を申に及ハす一千余騎にて近江国に打越る。笠きの物共申けるは、「既陣に取向ふ。縦上意として罷向へしと被仰といふとも、五郎左衛門程の者一人何事をかし出候へき」と申て一族ひとり三百騎はかり相副差遣て我身ハ大事の敵目にか陣に取向問、「罷立へからさるよし申さは、如

何に弓矢の道にも道理にも叶ハむ」とそ申ける。さて勢多橋を懸させ守山に打越処に大勢にて被押懸、五郎左衛門小勢にて叶ハしと思けん、土岐宮内少輔と一所に成んとて美濃へ越ける処に、垂井の土一揆おこり合て取籠散々に打散し主従五六騎命ハかりたすかりて行方知す落にけり。去程に堺の城には勝軍したりとて弥氣に乗けり。京勢ハ、「先度の合戦城責の用意無し余に敵を安平にして多の人を損たり。今度ハ能々責具足陣々用意を致さは何程の事か有へき」とて勢楼大三毬打を作り立て城を焼かむとの工なり。東方ハ深田なりけれハ一色今川の両手ハ直に城に責入らむとめ草を切こみ路をつくらせ思々の用意ともあり。さて「今度の合戦何ことか有へき」と先立の手いたさに諸人手をそ奉ける。十一月十九日夜半に伊勢大神宮外宮の高宮振動ありて西に向て鎗矢を放声三度きこえけるを、神人等慥に是を承ハる。「弘安の蒙古襲来の時も此御神殿より鎗矢出て廳蒙古対治せられければ、憑敷御事なり」とそ古老の神人共申合ける。同夜八幡振動ありて其声南を指て鳴渡たりけり。又北野の御霊、南を指て御飛あり。同き夜吉祥院の宝殿振動おひたしくして大鼓つゝみのこゑありけれハ、番の宮仕驚あかりて拝見すれハ、光物あまた御殿より出けり」とそ申す。「所々の靈驗異他なり、此度の合戦廳落居、大内被誅ぬ」と人々申合ける。さて御祈禱処々に有けるに、青蓮院宮鞍馬寺に於て四天王の法を修せらる。「昔より此法を修せらるゝ時凶徒対治なしと云事なし。近比ハ土岐御対治の時此法を被行、弟五箇日めに美濃国破れ御対治落居了。又山名の陸奥守か時同く此法を被行。冥慮にや依けん、弟（トマ）日め京都に乱入被討罪。今度代々の佳例に任て青蓮院鞍馬寺に御參籠決定修申に落居しぬ」とそ申ける。去程に合戦日を定けるに、「甚雨に依て焼草不可叶」とて一兩度延引しけり。重て十二月廿一日に日次治定して卯時より時の声を作り矢合して四方同時に責入処に、折節大風ハけしくして大三毬打に火を付て城中の矢櫓に方々よりたほしかけければ四方より焼入けるハ、譬へハ大唐の周瑜と曹操と赤壁と云所にて戦けるに、周瑜か方に黄蓋と云者謀として千余艘の舟に枯たる柴を積油をそゝき火を付て東南の風ハけしきに此舟を出しければ、矢を射ことくに岸なる曹操か陣に懸て船中の柴焼ける。火陣に飛散て人馬多く焼ければ軍兵あはてさハきけるに、陸より周瑜か兵懸て曹操か軍を破けんもかくやとそ見へたりける。爰に杉備

中入道、「今日ハ定て京兆打死せられんすらむ。本より約束の事なれハ京兆入道打死の後、豊後守ハ可打死。さらんに取てハ我ハ一番に打死せむ」とて北陣に有ける山名民部少輔か手に押懸て散々に戦て十余人打取。今日を前途の合戦なれハ堅さま横さまくもて十文字に向ふ敵を悦て切てまはりけるか、さすか手あまた負ひ、「今ハかう」と思ひ大音揚て、「大内の左京権大夫入道か内に杉備中守とて一人の当千の兵そや。我と思ハむ者ハ打取て高名せよ」とて大勢の中に破て入る。卅余騎たりあひ備中を取籠責戦ふ。備中敵五人に手負せ、や庭に三人打取て打死す。富田の尾張守備中打死したりと聞て大内〔C〕馳寄せ申ける。「備中を始として宗との者あまた打死し候ぬ。合戦難儀に及ふ。夜に入て舟にて御落ありて中国に御帰ありて時を待て本意を御遂あるへし」と云ければ、「我由なき物にすゝめられ此事を思立。運の尽ぬる上ハ何〔E〕か遁へき。さるためしあり。楚項羽四十万騎の軍兵を領し力拔^リ山氣蓋^ル世程^ニの威勢也けるか、漢高祖と天下を争ひ八箇年の中に七十余度の合戦に一度も。負さりけるに、最後に垓下と云所にて軍破て項羽ニ相従者わつかに廿八騎ありけるに、漢の兵五千騎にて追懸たり。爰ニ烏江亭の長船を用意して此江を渡るへし。此江を渡〔F〕江東千里にわたらむ」と申せは、項羽咲て云、「天〔G〕す。今ハ何か遁へき。戦の手に懸ても何かせん」とて、「漢王我頸を千金色万戸にかへんといひなれハ汝に与ん」とて自頭を切、亭長に与へけるとかや。我も思様に打死して名を後代にあけんと思たり」とて備中か打死したりける北の陣にかゝる処に、先管領同修理大夫入道も城へ切て入、散々に戦ふ。大内最後の合戦と思けれハ身をも惜ず、北より南に懸入西より東へわりて出づ。好長太刀持まゝに四方八方を払、兵法の手を尽して戦ふ。向敵をのかす事なし。修理大夫入道左衛門佐是をみて大内を打取らむと進ミける処に、甲斐兄弟大内〔H〕渡合戦けるか、甲斐大内か内甲をこみける〔I〕軍の下知に物いひにくかるへし」とて誦宛をせさりけるほとに鼻口二所手負けれとも散々に戦処に、野上の豊前陶山の佐渡同掃部を先として十余人落あひ敵を追しさらかし又管領の手に懸て合戦しけるに、大内か若党紀伊国住人富田と云者此二三日のほとに管領の手に降参したりけるか、「是こそ大内にて候へ」と尾張守に告けれハ、「さらば打取ん」とて尾張守二百余騎にて懸入けり。尾張守を目にかけ、卅騎はかりにて懸合て散々に戦ふ。敵

御方ハ知らず、やにわに死する者百余人、大内か後に引かへたりける国人二百余騎本より内通したりけれハ、管領の手
に一所になる。大内是を^{見て}大に怒て、「日本一の云甲斐なしとも一人ものか^{すました}きそ」と云て例の長太刀打振て
懸れば、二百余騎大内一人か威勢に恐れ足もためす三町はかりそ逃退く。たとへハ師子^{てん}忿て吼時八百千の獣おのゝき逃
くるもかくやとそミへたりける。大内なを尾張守を打取らむと切てかゝる。尾張守百余騎にて大内を取こめ責戦ふ。大
内に相従者十余人ありけるかみな深手負、引退て残とゝまる物とてハ森の民部丞也。民部思ける。は、「日比にかハリ大
将にはなれぬ者とも思々心々に打死す。弓箭取ハ前途の高名をしたれとも最後の死場わろけれハ名を失事也。我に於ハ
大将を離すして其前にて打死せんとて命をすて名を後代にあけん」と大将の前に塞る。大内ハ民部を討せしと向敵をそ
はより切ておとす。民部ハ大内を討せしと前に進て戦けり。尾張守是をみて、「とく討取」とそ下知しける。民部涙をな
かし申けるは、「御内の者五六千騎も候らんに、今ハたゝ一人御前にて打死仕らむ事、冥土の訴契のほとこそうれしけれ」
とのゝしりて終に打死したりけり。大内、「今ハかくそ」と云儘に大勢の中に懸入て尾張守に目を懸て切てまハる風情ハ、
樊会張良も争か是にはまさるへきとそ見へける。又尾張守馳合て攻戦ふ処に、大内さすか深手あまた負ひ一日の戦に力
も尽ぬれば、「今ハかう」と思大音あけて、「天下無双の名将大内左京権大夫を打取て御所の御目にかげよ」とて遂に
尾^{張守にか}合て打死す。やかて尾張守頸をとる。豊後入^道方^かを固て合戦しける。大内打死すと聞て、「今ハ爰にて戦
て何にかせん。大将の打死の所にて我も打死せむ」とて北の陣の大勢の中にわて入向ふ敵六七人切て落し、大力の剛の
者の命を惜ず大長刀打振てかゝりけれハ、嵐に木の葉の散様に二百余騎二町ハかり引退く。されとも山名の入沢同草山
二人ハ一足も不退、「豊後を打取む」と太刀の^ききを並てかゝる。豊後、「よき敵」と悦て散々に戦けるか、前に進草
山を切て落しけれハ、入沢大刀をはなけすて豊後に押並へてくまむと懸処を、豊後すきをあらせす長刀にてこみけるか、
鎧の胸板かけす後へつきとをしけれハ、入沢豊後か腹巻の袖を引寄刀^{にか}て豊後をさゝむとす。豊後守よりこみたる長刀
をはねければ二丈許なけられて、や庭に死す。豊後なを大勢の中に破て入散々に戦けるか、深手十余箇所に負ひ、「今ハ

叶ハシ」と思大音揚て、「日本一の大剛の者大内京兆入道内杉の豊後入道そ。我と思ハむ者ハ打取て弓矢の思出にせよ」とて大勢の中に破て入打死す。南の方ハ細川赤松手いたく戦間、嚴島の神主、「叶ハシ」と思て降参しけれハ、南の手も破て思々に打死する者もあり、腹切者も有けり。されとも新介か固たりける東方ハ難所にて左右なく被破す、一色今川両手に合て攻戦。今川上総入道、「此方ハ本より城一の難 [] つゝ功を可成」とて懸入けれハ、嫡子五郎同 [] として二百余騎入替いれかへ打つ打れつ火出ほとにぞ戦ける。一色左京大夫入道同子息右馬頭其勢五百余騎是も東方にて戦けるか、左京大夫入道、「此手只一度に攻破らむ」とてぬけ懸しけれハ、右馬頭を始として五百余騎つゝきて懸入責戦処に、山徒杉生円明二百余騎にて馳加り散々に戦ふ。新介か手五百余騎一色今川山徒等か手に合て入乱て戦ふ。二百余人打死す。新介申けるは、「京兆既打死する上ハ今ハ腹切ん」としけれハ、相従者二百余人、「我もく」と具足ぬきをき腹きらむとするに、平井新介か刀ををさへ申けるは、「京兆打死の上ハ尤御腹を召さるへき条、其理あり。乍去今度の事巡儀(備)の合戦にあらず、朝敵となれり。本より本意とも思食されぬ謀反なり。なにかは苦かるへき。御降参あるへし。命ハ義に依て軽とこそ申て候へ」と涙をなかつて申ければ、「降参と云事ハ我家の疵なるへし」と云て已三腹に刀をさしあつる処に、重て取つき平井種々に申ければ無力、「降参すへし」とて平井か諫言にそ従ける。三百余騎、「此上ハ」とて降参す。楠木二百余騎尚相戦けるか、「新介降参す」と聞て、「今ハ腹切に及ハす。降参も無益なり」とて大和路にかゝりて落行けり。菊地の肥前ハ自称にも似ず、打死もせずして行方知す落失ぬ。さるほとに城には [] 櫓勢楼より烈き風に火飛まハリ、堺一万 [] 至まで一字も残す同時に灰燼とな [] 宮(威陽)の焼けん火三年絶さりけるも今更思出 [] れたり。去程に陣々悉落居して翌日各打掃けるに、城の木戸のきわに一首の札をそ立たりける。

いさめしにかゝハリもせぬひちはり木功をもなさて打れける哉

とそ書たりける。勢共よりて見ける者、「けにも」とそ云ける。唐堯四海をつミして九州平き、虞舜三苗を伐て一天穏なり [] けるも、此御代にハ過。とそ覚へける。